

走資派批判で不安定、流動的

ソ連から見た当面の中国

ソ連、中国に強気の姿勢

予想されたとおり、ソ連共産党第二五回大会におけるブレジネフ書記長の演説はきわめて強気なものであった。少なくとも外交政策に関するかぎり、ここ一年来、ソ連は相次ぐ成功を記録している。なかでもインドシナ半島におけるハノイの中国離反と対ソ接近、アンゴラでの勝利、キューバの対ソ密着といった一連の第三世界外交の勝利は、反面で中国の失敗を代償とするものであるだけに、ソ連の姿勢はいきおい強気のものとなるのであろう。

かてて加えて、周恩来なき中国の内政がいわゆる「走資派」批判によって、きわめて不安定かつ流動的な状況になってきた。いかに中国の対ソ非難が激しくなろうとも、中国自身の足許に火がついているのではないか、という感触をソ連としてはますます強めざるを得ないのである。

そのようなソ連にとっては、既定の対外路線の継承こそ必要であり、路線を変更する必要はいささかもない。確かに、仏・伊両共産党の対ソ離反や全欧共産党会議の未開催など、国際共産主義運動内部には一部に問題が残っているが、それとて中国共産党がそこに食い込む余地のさらさらない問題であり、中国の影を伴うあらゆる問題でソ連はますます自信を深めているかのようだ。

以上は、ブレジネフ演説に照らしてソ連の対外路線を中国との関係で総括したときの私の見方であるが、このような評価は、去る二月にソ連共産党大会開催直前のソ連に滞在して得た私の感想とも一致するものである。

「ワンマン・プラス集団指導」

私は今回、ソ連科学アカデミー社会科学学術情報研究所の招待で二月八日から十九

日までモスクワに滞在し、帰途、テヘラン、ニューデリー、バンコク、香港、ソウルを飛び石訪問して二月下旬に帰国した。私がソ連科学アカデミーに単身招かれたのは、ソ連の中国研究者との学術交流が目的であり、ソ連は日本の中国研究、中国情報に大きな注目を寄せているからであるが、たまたま中国情勢が流動化しつつあったこともあって、ソ連での私のスケジュールはきわめて多忙なものであった。

科学アカデミーの学術情報研究所、ソビエト東洋学の伝統を誇る東洋学研究所などで講演したほか、極東研究所、国際労働運動研究所、アメリカ・カナダ研究所で意見交換、共同討議、ときには大論争を行い、モスクワ国際関係大学のメリクセトフ教授ほか大学関係の中国研究者とも懇談することができた。

なかでも、ソ連の中国学界の大御所カーピツァ、チフピンスキー両教授との会見は、この両氏が現在、ソ連外務省の重鎮でもあるだけに、ソ連の中国観、中ソ関係への展望などを知るうえで、私にとってもきわめて有益であった。ちなみに、中ソ関係史の第一人者カーピツァ氏は現在、ソ連外務省

極東第一部長として中国政策の責任者であり、先日グロムイコ外相とともに訪日したシュペチコ極東第二部長（日本担当）よりも地位の高い幹部会議のメンバーでもあって、一九六九年秋、北京空港での周恩来・コスイギン会談にも立ち会っている。チフビンスキー氏は孫文研究でわが国にも知られているが、ソ連外務省顧問であると同時に調査史料局長であり、一九六九年暮れの中ソ国境会談にはソ連代表団の顧問格として出席している。

私は、カーピツァ氏とは一夜、チフビンスキー氏とはある日の午後、膝を交えて語り合った。このような一連の会見を通じての印象として、まず第一に今日の中国情勢については、どの人々も深刻な党内闘争としてこれを見詰めており、当面は上海グループつまり文革派が勢いを得るのではないかと見なす意見が多かった。鄧小平氏らの旧実権派については、あまり評価していないことにいささか驚いたが、カーピツァ氏などは鄧小平氏が後継指導体制の中心を担うことは「絶対にあり得ない」と力説して、その理由としては、文革で批判された人物であること、すでに高年齢であること、政

治局に基盤がないこと、党全体に支持者が少ないことを挙げていた。

毛なき中国の後継指導体制は「ワンマン・プラス集団指導」だといって、そのワンマンはやはり上海グループから出るだろうとのこと、張春橋氏にやはり注目しているようであった。当面の毛沢東主席の指導力については、かなり高く評価しており、去る十二月二十七日のソ連・ヘリコプター要員釈放事件についても、最後的には毛主席が決断したのであろうとの意見であった。

中ソ和解の可能性少ない

ところで、右のヘリコプター要員釈放事件は、中国側が意表をついた釈放の仕方をしたために、すわ中ソ和解へのシグナルではないかとワシントンに大きな波紋を投げたのであったが（この問題について詳しくは、拙稿「『新太平洋ドクトリン』と中ソ冷戦」、「中央公論」一九七六年三月号参照）、ソ連側は全くそのようには受けとめておらず、ソ連の一貫した正しい主張と強い釈放要求が今回の結果をもたらしたのだとして、それなのに中国は卑劣にも釈放に際し小細工を弄したと、従来は温厚なチフ

ビンスキー氏がこぶしを振り上げて怒っていた。

ソ連は、今日のように毛主席健在に置いてさえ中国内部で反毛の動きがあるのだから、毛沢東以後には必ずもつと大々的に反毛の動きが出るだろうと見ており、それに関連した中ソ関係の改善に対処すべき用意は常にして、要は相手の出方次第だ、とカーピツァ氏もチフビンスキー氏も話っていた。それでは、中ソ関係に将来ドラチックな変化があるのかというと、そのような変化はもはやあり得ないだろうと見ている人が圧倒的に多かった。

この点でソ連の研究者は一様に五〇年代の中ソ友好時代を古きよき時代として追想しながらも、中ソ関係にもはやルネッサンスはあり得ないと考えている。私は今回の訪ソによって、今日の中ソ対立はすでに現代史の内部にビルト・インされた歴史的過程であり、ある朝目が覚めたら中ソがかつてのような一枚岩の団結に戻っていたなどということはもはやほとんどあり得ないことを改めて痛感した次第である。

〈東外大助教授 中嶋嶺雄〉